

令和7年1月18日(土)実施

前期

国語 (50分 100点)

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにしてください。
解答用紙は別になっています。
- ② 問題は 【一】 ～ 【三】 まで 3 題あります。
- ③ 試験時間は 50 分です。
- ④ 解答用紙には、以下の例にならって受験番号、中学校名、氏名を必ず記入してください。

受験番号:1038 氏名:興南 太郎 出身中学校:〇〇〇〇中学校 の場合の記入例

 のところへ記入してください。

得点(記入しないこと)

令和〇年度 〇〇入試 〇〇解答用紙

氏名

興南 太郎

(記入例)

良い例		
悪い例		

出身中学校

〇〇〇〇 中学校

番
号

1
0
3
8

記入しない

左から順に0～9がならんでいます

- ⑤ 解答は解答用紙の所定のところに記入してください。
- ⑥ 解答は楷書で丁寧^{かいしよ}に記入してください。
- ⑦ 抜き出し問題にルビがふつてある場合、ルビは抜き出さないでください。
- ⑧ 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

【一】 次の《文章Ⅰ・Ⅱ》を読み、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

《文章Ⅰ》

文章にとって何よりも大事なものは、すぐれた内容としてそのまま相手に伝わることである。したがって、いい文章には「いい内容」と「いい表現」という二つの側面がある。

どれほど^aコ^{||}った多彩な表現が繰り広げられても、その奥にある内容がつまらなければ、文章全体として価値が低い。それでは、いい内容はどのようにして生まれるのだろうか。すぐれた内容を生み出す特定の手段のようなものは考えられない。^A小手先の技術といたったものは役に立たない。自己を取り巻いて果てしなく広がる世界のどこをどう切り取るか、それをどこまでよく見、よく考え、よく味わうか、そういうほとんどその人間の生き方とも言えるものがそこにかかわっているからである。豊かな内容は深く生きることとおして自然に湧き出るのだろう。

一方、どれほどすぐれた思考内容が頭のなかにあつたとしても、それが直接人の心を打つことはできない。というよりも、言語の形をとることによって、それがすぐれた思考であることがはじめて確認できるのである。その意味で、文章表現はナカ^bば発見であり、ナカ^bば創造である。いい内容がいい表現の形で実現し、いい文章になる。逆に言えば、すぐれたことばの姿をとおしてしか、すぐれた内容というものの存在を知ることとはできないのである。

それでは、いい表現はどのようにして生まれるのだろうか。それはまず、観念とも感情とも感覚ともつかぬ不定^Bの何かに突き上げられるという内面的な切迫感を伴わなければならない。そのような芸術的シ^{||}ョウドウはある言語形式に自動的に定着するわけではない。そこには文章体験・執筆動機・作品意図・表現対象・伝達相手といったさまざまなものがからむ。文章表現が個人の主体的な行為でありうるのはそのためである。

このようにして、世の中にはいろいろな文章が現れる。④ どちらがどれだけすぐれているかという比較のできない、文体という質的な違いを有する多数の文章が存在する。が、いかに個性的な名文であっても、それがいい文章である限りは必ず備わっている表現上の共通点がある。それは明晰な通達性である。読む人にわかってもらえなければ、その文章の価値は生きない。通じない文章が人を感動させるはずはないからである。

したがって、どのような文章を書く場合でも、人にわかるように表現することが大切である。間違いなく相手に伝わるように、次の二点に注意して書くようにしたい。一つは、正確に表現することである。⑤ 不正確な文章では内容が不正確に伝わりやすいからだ。この場合の「正確」という意味は、表現内容を間違いなく言語化することを指し、必ずしも情報が高い精度で再現されることにはならない。例えば、約一週間の旅行について書くとする。その旅行期間も、事実を厳密に記すなら、何日何時間何分何秒となるはずだ。

しかし、必ずしもそう書いた文章だけが、正確だとは言えない。「一週間ほど」「一週間近く」「一週間あまり」、あるいは「一週間にも及ぶ」「わずか一週間にすぎない」などのどの言いまわしが自分のそのときの気持ちを最も適切に表すか、というレベルでの「正確さ」である。単に「一週間」といった、情報的にはかなり不正確な言い方が、時には最も正確な表現になりうる。もう一つは、わかりやすく書くことである。たとい正確に表現されていても、それがわかりにくい文章であれば、相手は真意を理解できなかったり誤解したりする危険が大きいからだ。

すぐれた内容を正確にわかりやすく表現する、それがいい文章を書く基本である。この基本がしっかりと身についたら、次にもう一歩進んで、表現を豊かにし、文章に深み加えるように心がけたい。ことばをみがくのである。

【 中村明『日本語の美―書くヒント―』（明治書院）より一部抜粋 ※問題作成の都合上、一部改変】

問一 二重傍線部 a↘c のカタカナを、漢字に直せ。

a コった多彩な表現 b ナカば発見であり c そのような芸術的シヨウドウは

問二 波線部 A「小手先」 B「不定」の意味として最も適当なものをそれぞれ次のア↘エから選び、記号で答えよ。

A 小手先

ア 器用な技術 イ ちよつとした技能 ウ 未熟な考え エ 他者の模倣

B 不定

ア 迷いがいい イ 誤りがいい ウ 決まっていけない エ 変わることがない

問三 傍線部①「いい表現」と同じ内容を比喩的に表した語句を《文章Ⅰ》から九字で抜き出せ。

問四 傍線部②「いい内容」はどのようにして生まれるのだろうか」とあるが、「いい内容」を生み出すのに必要なこととは何か。《文章Ⅰ》から七字で抜き出せ。

章Ⅰから七字で抜き出せ。

問五 傍線部③「いい表現はどのようにして生まれるのだろうか」とあるが、「いい表現」とはどのようなものか。最も適当なものを次のア↘エから選び、記号で答えよ。

ア 文章の感覚を限界まで研ぎ澄ますことから生まれるもの。

イ 自然に生じる感情を素直に言語化することから生まれるもの。

ウ 読書を通して様々な表現技法に触れることから生まれるもの。

エ 鬼気迫るような表現への湧き上がる心の動きから生まれるもの。

問六 傍線部④「世の中にはいろいろないい文章が現れる」とあるが、筆者の考える「いい文章」の条件とはどのようなことか。最も適当なものを次のア↘エから選び、記号で答えよ。

ア 文章のすぐれた表現を読む人が楽しめること。

イ 文章を書く人の思想がそのまま反映されていること。

ウ 文章を読む人すべてが内容を明瞭に理解できること。

エ 文章のすぐれた内容がはつきりと読む人に伝わること。

問七 傍線部⑤「正確に表現すること」とあるが、その内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 文章を書く人自身の内面と一致する表現を選択すること。

イ 文章を書く人自身の能力に応じた表現技法を用いること。

ウ 文章を書く人自身の体験を情報として正しく伝えること。

エ 文章を書く際に、読む人の読解力を考慮して述べること。

※設問は次のページへ続く。

問八 次の《文章Ⅱ》は、《文章Ⅰ》の筆者が志賀直哉の『城の崎にて』という小説から抽出した一文について述べたものである。
これを読み、生徒が《文章Ⅰ》との関連性について話し合った。空欄 i (七字) ・ ii (八字) に当てはまる語句を《文章Ⅱ》から抜き出せ。それぞれ指定の字数に従うこと。

《文章Ⅱ》

他の蜂が皆巢へ入って仕舞った日暮、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見る事は淋しかった。——志賀直哉『城の崎にて』

名文として知られる志賀直哉の『城の崎にて』は、冒頭で、作者自身が山手線の電車にふれて怪我をし、その後養生のために城の崎温泉に来ていることを述べている。ひとつまちがえば死んでいたかもしれない事故だったから、まさに死と隣り合わせの一瞬を体験したことになる。(中略)

冒頭に掲げた一文は、谷崎潤一郎が当時のベストセラーとなったその著『文章読本』で引用し、日本文の簡潔調の「見事なお手本」と評して、そのすばらしさを絶讃して以来、名文の見本として長く読み継がれてきた一節の一翼を担ってきた。このあたり、一語一語が数倍の価値を帯びて紙面が光るとまで説く、谷崎の筆は躍っている。

このような文章がまぎれもない名文の一例として、長い間にわたって不動の地位を占めてきたのは、何よりもまず、対象となる事柄を自分の眼できつちりととらえ、その事実の奥に流れる生きものの哀しみを、自然な感情のうちに素直にくみとった、その表現の深さのせいであつたろう。

【 中村明『日本の一文30選』(岩波書店) より一部抜粋 ※問題作成の都合上、一部改変 】

生徒A 志賀直哉の文は、観察によって i (七字) をとらえて正確に描写しているという点が、《文章Ⅰ》で述べられている「いい表現」に当てはまると思います。

生徒B 時間や温度という情報を高い精度で述べているわけではないけれど、「日暮」「冷たい」といった情景があることで、蜂の死骸を見た時の「淋しかった」という心情がイメージしやすくなっていると感じました。

生徒C 筆者の中村さんが引用した文は ii (八字) について述べていて、まさに「いい内容」だと思いました。「死と隣り合わせの瞬間を体験した」志賀直哉の考えが、ことばとして表れています。

生徒D 「いい内容」と「いい表現」が読み取れるから、谷崎潤一郎は「見事なお手本」と評価したのだと思います。『城の崎にて』の全文を読んでみたいです。

【二】 次の《文章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ》を読み、後の各問いに答えよ。答えは楷書で丁寧^{ていねい}に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合採点されないため注意せよ。

《文章Ⅰ》

渋川^{しかわはるみ}春海^{はるみ}、本名安井^{やすい}算哲^{さんてつ}は、囲碁^{いご}を教えることを仕事として幕府に仕えていた。しかし春海はこの仕事に飽きており、その代わりに算術や天文学を自ら学んでいた。ある時、春海は幕府から、北極出地^{きたきょくしゅち}（日本各地で北極星を観測する役目）を命じられた。春海はなぜ自分にその役目が命じられたのか分からぬまま、同じ役目を命じられた建部^{たけべ}と伊藤^{いとう}という者と一緒に日本各地を旅しながら観測を行っていた。この場面は、春海がその役目の中で伊勢を訪れ、伊勢神宮にて頒暦^{はんれき}（カレンダー）を購入した場面である。当時は、「宣明暦^{せんみょうれき}」という中国から伝来した暦をもとにしつつ、各地で手を加えた暦が作られていた。

春海^{はるみ}も頒布^{はんぷ}所で頑張^{がんぱ}って手を伸ばし声を張り上げ、自分の分を買っている。

伊勢^{いせ}暦^{れき}はもっぱら伊勢神宮の御師^{*1 おし}たちが頒布^{はんぷ}し、その権威、また日本全土にフキ^{ふき}ユウ^{ゆう}する知名度の高さから、伊勢特産の箸^{はし}や櫛^{くし}、金物や織物などにも増してチョウホウ^bがられる一品だ。

その夕べは天測が予定されておらず、春海は割り当てられた宿部屋で、久々にごろごろしながら伊勢暦を娯楽^{*2 むらく}としたひとときを過ごした。この頃の暦には難解な暦註は印刷されておらず、一日ごとに、細長い仮名文字でその日の吉凶などが大まかに記されている。

それにしても暦というものも実に不思議なしろものだ。日本全国、ほぼ同じものが出回っているにもかかわらず、自分が手にした

瞬間、それは自分だけの時を刻み始めるのである。暦に記された諸事の注釈も、こうして眺めている自分にとってのみ意味があるものに思えてくる。

ふと表紙を見直し、手にしたものが寛文二年^{*3}壬寅^{みずのえとら}のものであることを確かめた。今年が自分にとつてどんな年であるかが、十千十二支という、ただそれだけで、なんとなく漠然と理解できる気がしてくる。あるいは託宣^{*5}にも似た、日々の生き様の指標となる何かが降って湧くような思いがする。今自分が手にしているのが伊勢暦であることが余計にその実感を裏打ちした。

というより伊勢暦自体は江戸でも手に入るのだが、伊勢に参宮した上でいただくところに有り難さがあつた。ちなみに江戸では幕府公認の「三島暦」が一般的で、これは伊豆国にある三島大社の河合家が編暦しており、その起源は源頼朝にまで遡^{*6}るといふ。かなり昔から版木を用いて刷られているため、版木による暦全般を指して三島暦と呼ぶ者もいるほどで、その権威は伊勢暦に勝るとも劣らない。

他方で、本来、頒暦は京都で発行されて各地に下されるものという考え方も根強く、その点では「京暦」がいまだ権威の筆頭であると言えた。^{*7}幕閣でもときとして京暦と三島暦の僅かな相違^{わず}がもとで、いずれを公式の暦日として扱うべきかで議論が起こるらしい。

特に「大小月」が、それぞれの暦でずれると大変だった。大の月とは三十日間の月のこと、小の月とは二十九日間の月のことで、十二ヶ月いずれの月が大か小かを割り当てるのである。

これがずれると、あちらの暦では朔日^{*8}なのに、こちらの暦では晦日^{みそか}であるといったことになり、公式の祭礼から年貢^{ねんぐ}の取り立て、商人たちの月々の支払いやら貸付利息^{かしつけ}やらが、ずいぶんと混乱する。そうならないためにも幕府は強いて三島暦を公認とし、他の暦を用いない場合が多いのだという。

そうかと思うと、そうした高い知名度を誇る暦の他にも、各地でそれぞれ幕府の許しを得て頒暦を作り、売買する神社や商家もある。いずれもソウイ工夫に富んだものが多く、またのちには暦から略暦を作成し、その裏表に、薬屋だの花屋だのの宣伝を盛り込む代わり、各店舗から一定額の金を集める、ということまで行われる有り様だった。

暦日や祭日、大小月の統一という点からすれば、取り締まられてもおかしくないことだが、人々がその土地土地で編まれる暦を求める限り、消えてなくなることはなかった。

つまるところ暦とは、絶対的な必需品であると同時に、それ以上のものとして、毎年決まった季節に、人々の間に広まる“何か”なのであろう。

それはまず単純に言って、Aだった。文字が読めない者も、絵暦を通して楽しむことが出来る。それどころか、今年の大小月の並びが絵の中に隠されており、謎解きのようにして読まねばならない頒暦もあった。そういう遊びが成り立つほどの万人共通の品なのである。

さらにそれは教養でもあった。信仰の結晶でもあった。吉凶の列举であり、様々な日取りの選択基準だった。それは万人の生活を映す鏡であり、尺度であり、天体の運行という巨大なBがもたらしてくれる、“昨日が今日へ、今日が明日へ、ずっと続いてゆく”という、人間にとってなくてはならない確信の賜物だった。

そしてそれゆえに、頒暦は発行する者にとっての権威だった。

最後の一つを思いついた途端、春海は普段の行儀の良さはどこへやら、灯りの周辺でごろごろ寝返りをうつとともに、ふいに不遜とも言える方向へ思考が転がっていくのを覚えた。

もしかすると暦とは、一つに、人々が世の権威の所在を知るすべなのかもしれない。江戸や京や伊勢といった世の権威を、

公然と、またひそかに比較しうる道具なのである。

どの権威がより権威的であるかを、あたかも人々が自由に議論することで、決定しようというように。いや、実際のところ暦を發行し、人々がそれを正しいものとして受け止めることによって、様々な権威の大部分が成り立っているのではないか。

なんだか急に不安になって春海は身を起こした。畳の上に暦を置き、やや後ずさつてから、腕組みして眺めた。今の自分の思考には、妙に剣呑なものがふくまれているような気がする。いや、実際それはとてもなく剣呑であるように思えてならない。おいそ

れと口にはいけないものだという確信があった。いったい何がそこまで剣呑だというのか。思わず首を傾げると同時に、突然ひやつと背筋が寒くなった。

権威の所在、つまり人々は、徳川幕府というものを絶対的なものとして崇めて^{あが}いるわけではないのか。帝のおわす京、神々の坐す^ま神宮、仏を尊崇する寺院、^{*9}五畿七道に配置された^{*10}藩体制。人々が自由に権威を選ぶ余地はいたるところに残されており、しかもそうした余地は、決して誰にも埋めることのできないものなのではないだろうか。

【語注】

【沖方丁『天地明察』（角川文庫）より一部抜粋。 ※問題作成の都合上一部改変】

*1 御師…社寺に属し、信者のために祈禱^{きとつ}を行い、参詣^{さんけい}のために宿泊・案内などの世話をする下級の神職。

*2 曆註…古曆の日付の下に付した注記のこと。下段には日の吉凶に関する諸事項を記するのが慣例。

*3 寛文二年壬寅…一六六二年。 *4 十干十二支…干支^{えと}のこと。 *5 託宣…お告げ。 *6 幕閣…幕府の中枢にいる人。

*7 朔日…一日。月のはじめの日。 *8 晦日…月の終わりの日。 *9 五畿七道…日本全国。

*10 藩…江戸時代に、大名が支配する領地および支配機構の総称。

《文章Ⅱ》

春海は北極出地の役目を終えて、自宅に帰っていた。ある日、春海は会津藩主であり、徳川幕府將軍・家綱いえつなを助けて政治を取り仕切っていた保科正之ほしなまさゆきから呼び出され、囲碁の勝負を挑まれる。一局目は春海が勝ち、続けて二局目を指している場面である。

「武断しりぞを排け、文治を推し及ぼす……それこそ徳川幕府の為すべき『天下の御政道』でなくてはならぬのだ。そして今、そのため
の、まったく新たな一手が欲しい」

そういつて正之は、ぱちんと石を置いた。重々しい話題とは裏腹に、碁自体は、あくまで純粹に楽しんでいるような打ち筋である。
春海もおのずと幾つもの手筋が思い浮かび、いつまでも打っていたくなるような気持ちにさせられていたのだが、

「それは、いかなるものでございましょう？」

問いつつ、何気なく打とうと上げた手が、正之のひと言で、宙に凍りついた。

「その前に、難儀せんみょうれきと思うが、この老人に、宣明暦せんみょうれきというものについて教えてくれぬか」

さながら落雷のようにその言葉が春海を直撃した。俄然がぜん、脳裏に何かよみがえが甦よみがえった。咄嗟とっさにそれが何であるかわからず狼狽ろうばいが顔に出
そうになったが、はたと理解した。

欠けた月。

*1げつしよく

伊勢で、建部と伊藤とともに観測した月蝕よみがえだった。そのときの建部と伊藤とのやり取りが急激に甦よみがえるのを覚えながら、春海は
震えそうになる手にして力を込め、

「八百年余の昔……我が国に将来されし暦法にございます」

言いつつ、ぴしりと盤上に石を置いた。正之は小さくうなずいて新たな石を手を取っている。何も言わない。次の一手を考えながら、ただ春海の言葉を待っている。

「長き伝統を誇る暦法ですが、今の世に、その術理はもはや通用しておりません」

「なにゆえであらうか？」

石を置きつつ惚けたように訊いてくる。春海は、ここに至って不遜を怖れず告げた。

「八百年という歳月によって、術理の根本となる数値がずれたからでございます」

それは近頃、算術家や暦術家の間で、なかば公然と議論されることがらであった。春海も、その術理を検証し、かつて建部と伊藤が言ったことが真実であることをようやく理解している。

宣明暦の暦法に従えば、一年の長さは三百六十五・二四四六日である。

だが実際の観測に照らし合わせると僅かに一年より長い。その誤差は百年でおよそ〇・二四日。八百年では実に二日の誤差となる。

それがただの空論でない証拠に、宣明暦に従う全ての暦が冬至^②と定める日よりも、Xに、Y本当の冬至が過ぎていくことは、多くの暦術家がその観測をもつて認めるところだったのである。春海はそうした点を告げ、

「冬至の他にも、朔や望、いずれは日月蝕の算出にも支障をきたすこととなりましょう」

「いずれ蝕の予報を外すか」

「は……」

「では、^{*2}“授時暦”というものについて教えてくれぬか」

③それが二度目の落雷となつて春海を打った。息苦しいまでの緊迫に襲われた。話がどこに流れていくかが突如としてわかってき

た。だがなぜ自分にそれを言わせるのかという疑問は拭えず、それが異様な緊張を春海の身に及ぼしながらも、精一杯の気魄^{きはく}を込めて言った。

「かつて発明されたあらゆる暦法の中で、最高峰と称されし暦法でございます」

(中略)

授時暦こそ中国暦法の最高傑作であり、春海はそれを十代の頃に京で学んでいたが、今の歳になってようやくその素晴らしさに開眼したばかりで、

「星はときに人を惑わせるものとされますが、それは、人が天の定石^{*3}を誤って受け取るからです。正しく天の定石をつかめば、天理暦法いずれも誤謬^{*4}無く人の手の内となり、ひいては、天地明察となりましょう」

自然と、いつか聞いたその言葉が口について出た。あの北極出地の事業で、子供のように星空を見上げる建部と伊藤の背が思い出され、我知らず、目頭が熱くなった。

「天地明察か。良い言葉だ」

正之が微笑^{ほほえ}んだ。先ほどの殺伐^{*5}とした枯淡^{こたん}さはなく、穏やかで、ひどく嬉しげだった。そしてその微笑みのまま呟^{つぶや}くように言った。

④「人が正しき術理をもって、天を知り、天意を知り、もって天下の御政道となす……武家の手で、それが叶えられぬものか。そんなことを考えておつてな」

なかば盲^{*6}いた正之の目が、そのとき真つ直ぐに春海を見据え、

「どうか、算哲、そなた、その授時暦を作りし三人の才人に肩を並べ、この国に正しき天理をもたらしてはくれぬか」

⑤それが三度目の、そして正真正銘の落雷となつて、春海の心身を濡れる思いで満たした。

【語注】

*1月蝕…春海は、北極出地で月蝕を目撃した。その月蝕が起きることを、宣明暦に基づく現在のすべての暦が正確には予期できていなかった。春海はこのとき建部と伊藤から、宣明暦が実際の天体の運行とずれてしまっていることを教えられた。

*2授時暦…一二八〇年、中国の元の時代に郭守敬・王恂・許衡の三人が作製した太陰太陽暦。

*3定石…物事をするときの、最上とされる方法・手順。

*4誤謬…まちがい。

*5枯淡…淡々としていること。

*6盲いた…盲目。

《文章Ⅲ》

中国天文学は暦をより精緻せいちにするために発達したといつてよく、年を追つて暦法に改良が加えられた。

(中略)

中国では観象授時かんしょうじゆじ、つまり天体を観測して正しい時Ⅱ暦を民に授けることが帝王の任務であり特権であるとされたところから、歴代王朝は暦法の改良整備に力を入れた。当然一王朝の間にも改暦があり、また王朝の更替こうたいにともなつて新しい暦法が制定された。

(中略)

年号が制定され、時空を支配する帝王の権威がさらに明瞭に示されるようになると、ある王朝の制定した年号を遵守じゆんしゆし、暦法を用いることが正朔せいさくを奉ずるほうこと、すなわち臣従することの証あかしとされた。

【岡田芳朗『暦ものがたり』（角川学芸出版）より一部抜粋。 ※問題作成の都合上一部改変】

問一 二重傍線部 a c のカタカナを、漢字に直せ。

a 日本全土にフキユウする

b チョウホウがられる一品だ

c いずれもソウイ工夫に富んだものが多く

問二 文章中の空欄 A・B に当てはまる語句を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

A ア 娯楽 イ 風流 ウ 工夫 エ 仕事 オ 便利

B ア 調和 イ 運命 ウ 矛盾 エ 妄想 オ 事象

問三 傍線部①「妙に剣呑なものがふくまれているような気がする」とあるが、この時の春海の心情を説明したものとして、最も適当なものを次のア～エから選び記号で答えよ。

ア 「剣呑」とは危険が迫っているように感じられるということを意味する語であり、春海はまだ明確に言語化できないものの、何か嫌な予感を抱いている。

イ 「剣呑」とは今にも一触即発となる事態が起きそうな危機感を覚えるという意味の語であり、春海は脳裏にそうした過去の出来事が思い浮かんで焦っている。

ウ 「剣呑」とはやるべきことが目前に迫り、居ても立ってもいられないという意味の語であり、春海は前々から計画していたことをやろうと、決心している。

エ 「剣呑」とは理解できない出来事に直面し、とまどうということの意味する語であり、春海はここでそれまでは思いも寄らなかったことに思い当たり、困惑している。

問四 傍線部②「冬至」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1) 《文章Ⅱ》中の空欄 **X** に入る一節として、最も適当なものを次のア～エから選び記号で答えよ。

ア ○・二四日も前 イ ○・二四日も後 ウ 二日も前 エ 二日も後

(2) 「冬至」について、事典で調べてみると次のような記述があった。これをふまえて、《文章Ⅱ》中の空欄 **Y** に入れることができる一節として最も適当なものを、次のア～エから選び記号で答えよ。

黄道上の黄経が二七〇度の点を冬至点といい、太陽の中心がこの点を通過した瞬間を冬至という。現行の暦では毎年十二月二十二日ころ起こる。太陽はこのときもつとも南に位置し、日本のような北半球にあつてはこの日に日中の長さがもつとも短く、太陽の南中時の影の長さがもつとも長い。日本で用いられた陰暦、すなわち中国流の太陰太陽暦では冬至は暦法の原点として二十四節気のうちでもつとも重要なものであった。暦法はまず太陽の影の長さを測定して冬至の日時を決め、前年の冬至の日時との差から一太陽年の長さを決めることが基本となった。(中略)また、冬至の含まれる月を十一月とするという決まりがあり、とくに冬至が十一月朔日に当たると、これを朔旦冬至といって祝賀が行われた。

【『世界大百科事典』(平凡社)より一部抜粋。 ※問題作成の都合上一部改変】

ア 最も影の長さが長くなる イ 最も十一月に含まれる確率が高い

ウ 最も各地で祝賀が行われる エ 最も太陽の南中高度が高くなる

問五 傍線部③「それが二度目の落雷となつて春海を打った」から傍線部⑤「それが三度目の、そして正真正銘の落雷となつて、春海の心身を濡れる思いで満ちた」に至るまでの春海の心情の変化を説明したものとして、最も適当なものを次のア～エの中から選び記号で答えよ。

ア 傍線部③では、正之が授時曆に言及したことの理由が全くわからず、呆然としていたが、正之が改暦を依頼したことでその真意が初めてわかり、傍線部⑤では身に余る重責に打ち震え、恐怖の念を抱いている。

イ 傍線部③では、正之が授時曆に言及したことで、改暦の意向を示している可能性を感じ始めたが、なぜこの場で自分にその話をするのかわからず、改暦の依頼をされた後も、傍線部⑤では他人事のように感じている。

ウ 傍線部③では、正之が授時曆に言及したことで改暦の意向があることを察しつつ、なぜ自分にその話をするのかわからなかったが、改暦の依頼をされた後の傍線部⑤では正之の意を察し、万感の思いを抱いている。

エ 傍線部③では、正之が授時曆に言及することを事前に予想していたとはいえ、まさか本当に言うとは思わず驚いたが、傍線部⑤では春海自身が自分の役目をはっきりと理解し、その重責を再び認識し始めている。

問六 傍線部④「人が正しき術理をもって、くそんなことを考えておってな」について、先生と生徒A・Eが話し合った。この会話をふまえ、後の(1)・(2)の問いに答えよ。

先生 …傍線部④は保科正之の発言だね。この発言を深く理解するために、《文章Ⅲ》もあわせてよんでみよう。中国では、Zという考え方があり、暦を民に授けることは帝王の特権であったことがわかるね。この《文章Ⅲ》をもとに、《文章Ⅰ・Ⅱ》を読んでわかることを話し合ってみよう。

生徒A …《文章Ⅱ》の冒頭にもある通り、武力によって治めていた時代が終わって、平和な時代になった中で、改暦が注目されたんだね。日本では八百年余りも前に中国から伝来した宣明暦が使われ続けていたと知って、びっくりしたよ。

生徒B …《文章Ⅰ》からわかる通り、江戸時代には各地で頒暦というのが作られていたんだね。ただ、その「大小月」なども統一されていたわけではなかったようで、ときには混乱も起きたことがわかるね。

生徒C…《文章Ⅰ》と《文章Ⅲ》から、暦が權威の形であることを読み取れるね。《文章Ⅰ》では伊勢暦・三島暦・京暦などが挙げられているけれど、こうして各地で暦を発行することで、各地に權威が生じてしまう危険性があるね。

生徒D…傍線部④の「天下の御政道」という発言の真意がわかったよ。天体の運行に照らして、正しい暦を作って民衆に示せることは、正しい權威の所在を民に示すことにつながるね。日本各地で正確な暦を作る動きがあったはずだよ。

生徒E…傍線部④にあるように、改暦を通して「天下の御政道」を武家が示すことで、民衆を正しい方向に導く權威を幕府が帯びるんだね。春海は幕府の側の立場だけれど、武断から文治へという幕府の転換点で、とても重い役割を担っているね。

(1) 先生の発言中の空欄 Z にあてはまる四字の語句を、《文章Ⅲ》の中から特定し、抜き出して答えよ。

(2) 生徒AとEの発言の中で、《文章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ》の内容に照らして明らかに読み取れない発言をしているものを一つ探し、Aと

Eの記号で答えよ。

【三】 次の《文章Ⅰ》は松尾芭蕉『おくのほそ道』の一節で、《文章Ⅱ》はそれに関連する新聞記事である。これらを読み、後の各問いに答えよ。答えは楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合採点されないため注意せよ。

《文章Ⅰ》

*1南部道遙はるかに見やりて、岩手いはでの里に泊る。小黒崎・みづの小島を過て、鳴子の湯より尿前せきの関にかかりて、出羽ではの国に越えんとす。この道旅人まれなる所なれば、関守せきもりに怪しめられて、やうやうとして関を越す。大山たいざんをのぼつて日すでに暮れければ、封人*2ほうじんの家を見かけて宿りを求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留*3とうりゅうす。

蚤虱馬のみしらみの尿する枕もと

あるじのいはく、これより出羽の国に大山おほやまを隔てて、道定かならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばといひて人を頼み侍れば、究竟*4くつきやうの若者*5そりわきざし、反脇差を横たへ、櫓かしの杖を携へて、われわれが先①に立ちて行く。今日②こそ必ず危あやうきめにもあふべき日なれと、辛からき思ひをなして後に付いて行く。

あるじのいふにたがはず、高山森々かうざんしんしんとして一鳥声聞かず、木の下闇やみ茂り合ひて夜行くがごとし。雲端*6うんたんにつちふる心地して、篠しのの中踏み分け踏み分け、水を渡り、岩に蹶つまずいて、肌つに冷たき汗を流して、最上もがみの庄しょうに出づ。

③ かの案内せし男のいふやう、

「この道*7ふよう必ず不用*8のことあり。恙つつがなう送りまゐらせて、仕合しあはせしたり」と、喜*8びて別れぬ。後に聞きてさへ、胸*8とどろくのみなり。

【 頼原退蔵・尾形 仂訳注 『新版 おくのほそ道 現代語訳／曾良随行日記付き』（角川学芸出版）より一部抜粋。 ※問題作成の都合上一部改変 】

【語注】

* 1 南部道…南部街道。盛岡方面へ通ずる。これまで芭蕉が通ってきた道。

* 2 封人…関所の番人。

* 3 逗留…滞在。

* 4 究竟…力の強い。

* 5 反脇差…刀身に反りのある刀。

* 6 雲端につちふる…強い風が地面の土を巻き上げ、雲の端から土が降ってくるように感じるさま。

* 7 不用のこと…乱暴なこと。山賊などがよく現れたことをいう。

* 8 胸とどろく…胸がどきどきすること。

《文章Ⅱ》

平泉で「おくのほそ道」(以下「ほそ道」)のテーマの一つ「源義経の足跡をたどる旅」^④にひと区切り付けた松尾芭蕉は、ここから南下、出羽^{でわ}の国(秋田、山形両県)へ向かった。

東北地方は、陸奥^{みちのく}と出羽からなる。ともに「同じ東北」と思っていたが、そう単純ではないらしい。読者からの手紙に「奥羽山脈^{おううさんみやく}を越えると、空気も違ってくるように思われます」とあった。意味深である。

山越えの厳しさ

その変化を、芭蕉と河合曾良^{かわいそら}は国境^{くにぎざか}で早速実感しただろう。

二人は、1689(元禄2)年5月15日(陽暦7月1日)、岩出山(宮城県大崎市岩出山町)から、小雨の中、出羽街道を西へ進んだ。30キロほど進めば国境。途中、小黒崎、美豆^{みず}の小島という歌枕があり、見物したようだ。

しかし、観光気分もここまで。出羽へ入る山越えの手前、仙台藩の関所「尿前^{しとまえ}の関」で二人は足止めを食らった。「この道は、旅人がめつたに通らず、関所の番人に怪しまれ、やつとこのことで関を越えた」(意訳)と「ほそ道」にある。

関所の厳格さは、仙台藩の気質か。ただ、これも序の口。本当に厳しいのは山越えだった。関所の先から約10キロ、山中の陰路が続く。「ほそ道」に記された「大山」、通称「中山越」。芭蕉たちは雨の中を進むうち日も暮れ、やつこのことで出羽側、現在の堺田（山形県最上町）にたどり着いた。

さて現代。記者も出羽街道（国道108号、47号）を西へ向かった。尿前の関は、こけしの産地、鳴子温泉の近くにある。鳴子温泉駅で道を聞き関跡を探すが、温泉街から2キロほど先、山の入り口に「中山越」の石柱がぼつん。前進するか思案するが、日帰りのため断念。先を急ぐ。

国道を進み、山形県に入って間もなく、堺田駅の表示と大きな茅葺きの古民家が現れた。堺田は標高約350メートル。太平洋と日本海とに水系を分かť分水嶺がある。ここでようやく奥羽山系を横断している実感が湧く。古民家は旧有路家住宅、通称

「X」。夜の大山を越えた芭蕉たちが、宿泊を頼み込んだ家の現物である。二人は大雨のため、この山の中の家で計2泊し、芭蕉は1句残した。

〈蚤虱馬の尿する枕もと〉。ノミやシラミに責められ、枕元には馬の小便する音が響く、すさまじい一夜だ、の意（佐藤勝明氏訳）。山越えの厳しさが詠まれた。しかし、漂うユーモアは何だろう。

出羽で作風変化

記者が馬屋を備えた館内に入ると、囲炉裏の炎が、薄暗い居間を赤々と照らしていた。周りでは家族連れらが、同館の管理人、中鉢藤一郎さん（66）の話に耳を傾けている。「昔、この土地の人々は馬を家の中で大切に育てた」「芭蕉は、嘆いたというより、山奥で出会った人々の暮らしをそのまま詠んだのだろう」

傍らでは、仙台市から訪れた男性（58）の、小学生の娘二人が「暖かいね」と囲炉裏に手をかざした。



埼玉県の女性Yさん(61)が話を引き継ぐ。堺田の先で芭蕉が越えた山刀伐峠(約4キロ)の登山を愛するYさんは「ほそ道」のその一節を暗唱し、こう話した。「山刀伐峠は、^⑤昼も暗く山賊が出た原生林の中の山道。地元の若者が、^{ごえい}護衛として芭蕉たちを峠の向こうに送った後、彼は『あなたたちを無事送れて、私は幸せです』と喜んだ。この、相手の幸せを自分の幸せと感じる若者の気持ちと、それに感激した芭蕉に、私は感動するんです」

それまで古典や伝説への感動を多く詠んだ芭蕉は、出羽に入り、生身の人間を詠み、語り出した。まるでドキュメンタリーだ。「ほそ道」は、奥羽山系を越え新章に入るといわれるが、この変化が、そのゆえんだろう。

【「尿前の関ゝ山刀伐峠〈蚤虱馬の尿する枕もと〉人間の営みそのままに」福島民友新聞2019年12月30日の特集記事
(<https://www.minyu-net.com/news/detail/201912309193>)より抜粋。※問題作成の都合上一部改変】

問一 二重傍線部 a・b の読み方を、現代仮名遣いのひらがなで答えよ。

a たがはず b まゐらせて

問二 《文章Ⅱ》中の空欄 X に入る語を、《文章Ⅰ》中から四字で特定し、抜き出して書け。

問三 《文章Ⅱ》の末尾の地図は、松尾芭蕉が「おくのほそ道」にて歩いたと推定されるルートを示したものである。《文章Ⅰ・Ⅱ》によると、「尿前の関」は地図中の選択肢ア～オのどの地点にあるか。最も適当なものをア～オから選び記号で答えよ。

問四 次の口語文ア～エの二重傍線部のうち、傍線部①「が」と同じ用法のものとして最も適当なものを選び記号で答えよ。

ア 今は晴れているが、午後からは雨だろう。 イ 私が彼の父だ。

ウ 努力することが大事だ。 エ 座席を我が物顔で占領する。

問五 傍線部②「今日こそ」から筆者の心内語（心の中で思っている言葉）となっているが、どこまでが心内語か。その終わりの三文字を抜き出して答えよ。

問六 傍線部③「かの案内せし男」と同じ人物を指している表現を《文章Ⅰ》から五字で特定し抜き出して答えよ。

問七 傍線部④「源義経の足跡をたどる旅」とあるが、松尾芭蕉が平泉を訪れ、人間の営みのはかなさを詠んだ俳句として最も適当なものを、次のア～オから選び記号で答えよ。

ア 古池や蛙飛びこむ水の音 かはす

イ 行く春や鳥啼き魚の目は泪 なみだ

ウ 夏草や兵どもが夢の跡 はもの

エ 五月雨をあつめて早し最上川 さがみだれ

オ 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

問八 傍線部⑤「昼も暗く」とあるが、この風景を描写した部分を《文章Ⅰ》から十五字以上二十字以内で特定し、その最初の三文字を抜き出せ。

問九 《文章Ⅰ》と《文章Ⅱ》を読み比べて、先生と生徒A・Cが話し合った。この会話中の空欄 i (六字) ・ ii (五字) iii (六字) に当てはまる語を、《文章Ⅱ》中から抜き出して答えよ。それぞれ指定の字数に従うこと。

生徒A…『おくのほそ道』の「平泉」の場面と、「立石寺」の場面は読んだことがありましたが、この場面は初めて読みました。《文章Ⅱ》によると、この《文章Ⅰ》の場面から作風が変化するそうですね。

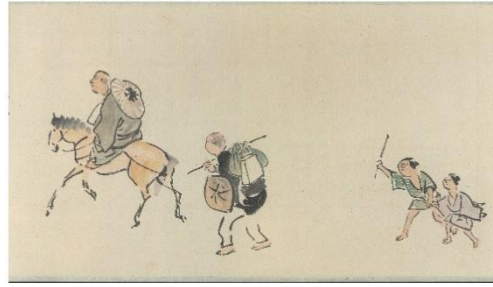
先生…実は《文章Ⅰ》の場面は、『おくのほそ道』という作品全体のちょうど中間くらいに位置する場面で、作品全体の構成としても転換点といってよいところに位置しています。

生徒B…なるほど。《文章Ⅱ》によると、《文章Ⅰ》より前では古典や i (六字) を、《文章Ⅰ》の場面からは ii (五字) を詠み、語り出したとあります。

生徒C…大きな変化だと言ってよいですね。《文章Ⅰ》で詠まれた俳句も、一見するとよく意味がわからなかったですが、《文章Ⅱ》にある通り「山奥で出会った iii (六字)」を詠んだものだと思ってみると、まさにドキュメンタリーのような臨場感のある場面が浮かび上がってきます。

問十 次のア～エの絵は、『おくのほそ道』の各場面を描いたものである。《文章Ⅰ》の場面を描いたものとして最も適当なものをア～エから選び記号で答えよ。

ア



イ



ウ



エ



【選択肢の絵は、「与謝蕪村筆 奥の細道図巻 復刻版」(便利堂)より一部抜粋。※問題作成の都合上一部改変】

